

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈母へのおもいに関する作文〉

小学生中学年の部 優秀賞

まもつてくれてありがとう

石川小学校三年

いちわ
市輪

りゅうのすけ
龍之介

受賞の言葉

ぼくの作文がゆうしゅうしようにえらばれたと聞いて、うれしい気持ちでいっぱいになりました。お母さんからのたんじょう日プレゼントになったその話を、今だけの気持ちに終わらせず、これからもずっと大切にしていきたいです。

ぼくは、八月十七日で九才になりました。生まれてから九年間がすぎ、今までいろいろなエピソードがあったことを、お母さんから聞きました。その中でも、とくにおどろいたことがあります。それは、にいがたけんの中えつ地しんをけいけんしたということです。

ぼくはその時、まだ一才になったばかりだったので、全くおぼえていないけど、とても大きな地しんだったそうです。

地しんの時は、いろいろな物が上から落ちてきたり、テレビやたなまてたおれてきたので、ぼくのお母さんも頭にけがをしたと言っていました。ぼくは、お母さんがまもってくれたので、どこにもけがはしなかったと言っていました。でも、ぼくがねていたすぐ上のテレビもたおれてきたので、落ちた場所がもう少しずれていたら、ぼくも下じきになっていたそうです。そして、ぼくたちがいた二かいのへやも、地しんでドアが開かなくなり、まどもないへやだったので、べつのへやにいたおばあちゃんが、ドアをこわしてようやくにげることができました。その時のお母さんは、とにかくぼくをまもるために一生けんめいで、むがむちゅうだった。と言っていました。ぼくは、お母さんの話を聞きながら、地しんはこわいなと思いました。そして、あの時みんながたすかって、本当によかったなと思いました。

地しんがおさまると、お母さんはこわれた家から、ぼくをだいたまま外へにげ出し、その後は、ひなん所でくらししたことも話してくれました。でも、ひなん所でくばられる食べ物は、パンが多かったので、たまごアレルギーだったぼくが食べられる物があまりなく、大へんだった話も聞きました。その話を聞いて、今ぼくが石川けんで元気にいられるのも、お母さんのおかげだなと思いました。

ぼくには、おぼえがないけいけんになるからこそ、お母さんはあの時の地しんのことを、ぼくが大きくなったら、ぜったいに話そうときめていたそうです。そして、「今でもあの地しんのきおくがわすれられない。」と言っています。それでも、みんなではげまし合いながら、やっところ

までこれたことを教えてくれました。そんな体けんをして、たすかったいのちなので、ぼくもその気もちをずっとわすれずに、大切にしていこうと思います。

地しんをのりこえて、今までいろいろなことがあったけど、どんな時でもお母さんがいてくれたから、がんばれたのかなと思います。そして、ぼくのために家の事や、おしごとをがんばってくれたり、休みの日には、いっしょにあそんでくれる所が大好きです。いつもは、おこることが多いお母さんだけど、いざという時には、ぼくの強い味方になってくれる所もいい所です。そんなお母さんに、「いつもありがとう。」と思っています。

これからも、お母さんにかんしゃしながら、たくさんの思い出を作っていくたいです。そして、あの地しんの時、ぼくをまもってくれたお母さんに、今どはぼくができることを見つけていきたいと思っています。